

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32665

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23350

研究課題名（和文）美術教師のライフコース研究－「教師性」と「作家性」の融合に注目して－

研究課題名（英文）Art Teacher's Life Course Study: Focus on the Integration of "Identity as a Teacher" and "Identity as an Artist"

研究代表者

久保田 めぐみ（KUBOTA, Megumi）

日本大学・芸術学部・研究員

研究者番号：50845807

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、作家業を本業とする美術教師（主に非常勤講師）のキャリアと、教師としての専門性に着目し、対象者たちがどのように本業の作家業を継続しながら教職を続けてきたのか、また、教職者として教育現場をどのように捉えているのか明らかにすることである。対象者へのライフ・ストーリーインタビューにより、次の点を明らかにした。対象者は制作の時間を確保するために非正規雇用を選択する一方、教職を含め様々な美術関係の仕事を得るためのネットワークを保持している。さらに、客観的に学校組織や美術教育の課題を検討する眼差しを持ち、子どもたちとの関わりを通じて教師としての専門性を磨こうとしている事例が複数見受けられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既存の研究では、教員養成系大学出身者が教職入職後にどのような成長を成し遂げているのかといった研究はなされても、非教員養成系大学の美術大学出身者については、教職入職後のキャリアに着目した研究がなされてこなかった。さらに、作家業と教職を兼務している者に着目した研究はみられない。対象者がどのようにして作家業と教職の折り合いをつけてきたのか。どのような視点で教育現場を捉えているのかについて、ライフストーリーインタビューによって明らかにした点は、キャリア教育の観点では芸術大学の学生の進路選択に関する研究を、教師教育の観点では美術教師の専門性に関する研究を進めることの一助となり得る。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to focus on the careers of art teachers who primarily work as artists (mainly part-time teachers), and their professional expertise as educators. It aims to clarify how these individuals have continued their primary career as artists while continuing their teaching profession, as well as how they perceive the educational field as teachers. Through life story interviews with the subjects, the following points were clarified: Subjects chose non-regular employment to secure time for their artistic production and maintain networks to obtain various art-related jobs, including teaching positions. Furthermore, multiple cases were observed where they possess a perspective to objectively examine issues in school organizations and art education, and strive to enhance their expertise as teachers through interactions with children.

研究分野：キャリア教育

キーワード：キャリア 教師教育 美術 アーティスト

1．研究開始当初の背景

本研究は、教師のライフストーリー研究とキャリア研究を背景としている。

教師のライフコース研究には、教員養成系大学の学生を対象に、教職に対する価値観の変容を示した研究や、その卒業生を対象に、教師の「語り」を手がかりにしたものなどがある（山崎,2012）。

しかし、これらは教員養成系大学出身の正規教員を対象にした研究であり、今回調査対象としたような、非教員養成系かつ制作者養成系の美術大学を卒業し、作家兼教師として働く非常勤講師は対象となっていない。さらに、個々人の「人生についての語り」であるライフストーリー研究には、高校教師の中年期の危機を明らかにした研究（高井良,2015）や、国語科教師の実践的知識に着目した研究（藤原・遠藤・松崎,2006）がある。当初、インタビュー対象者を世代ごとに分け、団塊の世代や就職氷河期世代など、時代に合わせて検討するライフコース研究とする予定であったが、対象者の世代に大きなばらつきが出なかったため、個人の人生についての語りに着目するライフストーリーインタビューで調査することとした。教育現場で、どのように試行錯誤しながら教職者として働いているのか、個々人の教育に対する想いや考えを聞くことで、対象者の教師としての姿を描けるのではないかと考えた。

また、キャリア研究に関しては、非常勤講師に頼らざるを得ない教育現場の労働環境を示したものや、非常勤講師は正規雇用教員と違って研修の場が与えられず、成長の機会が得られないといった、非正規雇用の教師に対してネガティブな面に着目した研究などが見られる（今井,田尻,2020 ほか）。しかし、今回対象とするのは、「作家業を継続するため敢えて非正規を選択している」教師たちである。彼・彼女らに着目することは、これまでなされてこなかった複数のキャリアを持つ教師の姿を描くことが期待できる。

2．研究の目的

本研究の目的は、次の2点である。第一に、これまで教師研究の俎上に上がることのなかった美術教師、特に作家業を本業としながら非常勤講師として学校に勤務する作家兼美術教師のキャリアに着目し、作家業を営みながら美術教師をしている対象者のキャリアを具体的に示すことである。第二に、調査対象者の教職者としての語りに着目し、教育現場をどのような視点で捉えているのか、どのように子どもたちと関わり、教師としての専門性を磨いているのかを明らかにすることである。

3．研究の方法

関東・関西・東海地域で作家活動を本業としている美術作家11名（男性：4名、女性7名）に半構造化インタビューを実施した。質問内容は 幼少期から小・中・高校時代と美術を志したきっかけ、美術大学入学から卒業までの学生時代、卒業後現在の仕事に至るまでの職業キャリア、といった職業に注目した内容と、 教師としてどのような想いで現場と向き合っているのか、教職に注目した内容の2種類とした。

調査対象者

（講師経験年数に関しては、短期間教職に就いた場合や、継続勤務していなかった期間も含むため、約〇年と示す）

	地域		性別	年齢	専攻・作品	非常勤先校種（過去の勤務先も含）	講師（支援員含）経験年数
1	東京	A先生	女性	40代後半	陶芸	中学校・高校	約20年
2	東京	B先生	女性	50代後半	油絵	中学校・高校・小学校	約15年
3	東京	C先生	女性	40代後半	油絵	高校（支援員）	5年
4	東京	D先生	女性	40代後半	日本画	高校（支援員）	2年
5	東京	E先生	男性	40代後半	彫刻	中学校・高校	約10年
6	東京	F先生	男性	50代前半	彫刻・写真	中学校・高校	約10年
7	関西	G先生	男性	40代前半	油絵	高校	約10年
8	関西	H先生	男性	40代後半	油絵	中学校・高校	約15年
9	東海	I先生	女性	50代前半	銅版画	専門学校	約20年
10	東海	J先生	女性	30代後半	デザイン・アクリル画	専門学校	約10年
11	東海	K先生	女性	50代前半？	イラスト・立体物	専門学校・高校・幼稚園	約20年

4．研究成果

対象者へのインタビューにより、以下のような語りの特徴が得られた。

（１）キャリアについて

制作の時間を確保するための非正規雇用

「管理職から正規教員採用への誘いを受けたが断った（B・D先生）」「これ以上非常勤でこの学校にいと、専任にさせられると思った（G先生）」「来年から、残念ながら正規雇用になります……ま、夏休みがあるから作品作れるかな（H先生）」

彼らは作品作りのためにあえて、非常勤講師として働いている。それにも関わらず「管理職から正規雇用の話があって」というエピソードが複数得られ、その話が出た途端に、長く勤めていた非常勤先を辞任した（「逃げた」）という語りも得られた。

仕事を得るためのネットワーク

対象者たちは、教職以外にも様々な職業を経験している。美術関連で言えば、画廊の手伝いや、美術予備校の講師、ワークショップの講師などであるが、それ以外にも、庭師、一般企業の会計、企画運営部門、印刷会社、老人ホームの調理担当など様々である。特徴的なのは、「アトリエ仲間から誘われて」「知人の紹介で」といった人脈で仕事を繋いでいくネットワークの強さである。非常勤先の学校も、「友達のところが空いたら、自分が入って、自分のところは誰かに紹介してうまく回っている（A先生）」とのことである。

このような仕事（アルバイト先）の獲得方法は学生時代から継続しているようであり、美術大学文化の一つになっていると考えられる。

柔軟な姿勢

インタビュー全体を通して感じたのは、作品作りを継続したいという一貫した想いとは別に、物事を柔軟に捉える姿勢である。

例えば、美術に興味のない低学力の生徒に、他の教員はやらせようとしなかったが、教科書の枠を超えた創造的な作品作りに挑戦させたというエピソード（B先生、G先生）教員の世界を積極的に同僚から教えてもらおうとしている語り（B先生）「とりあえずやってみた」と、紹介された仕事に楽しんで飛び込んでいく語り（I先生）が得られた。ここから、彼らの意識は作品作りでは内面に向かっている一方で、それ以外の場面では積極的に外と繋がる・繋げる意識を持っているように感じられる。（２）で述べたネットワークの強さも、そういった意識から発生しているものではないだろうか。

本調査の予備調査で、「作品を作っていると、ままならないことの方が多い」という語りがあった。「満足できるものが作れない」「作品がなかなか認められない」と、ままならないことを実感しているからこそ、完成形や正解があることを前提とせずに、まずは物事を受け入れようとする印象を受ける。この物事に対する寛容さが、彼らのキャリア形

成にも大いに影響を及ぼしていると感じられた。

(2) 教職について

以下3名の対象者を取り上げて記述する。

S 講師

作家活動を続けながら民間企業に勤めていた S 講師は、知人からの紹介で小学校の非常勤講師として入職することになる。しかし、勤務先の小学校は都内でも有名な(指導面で課題を多く抱える)「困難校」であり、前任者3名が辞職してしまったような学校であった。

多くのことを「教えてもらえない」と感じた S 講師は、自分から同僚やスクールカウンセラーに質問をするようになっていく。「学校の先生は、聞けば何でも教えてくれる」という文化を実感し、自力で教職について学ぶようになっていった。一方で、児童に対して諦めている教員たちも多くいることを実感する。「あの子たちは何もできないから」という姿勢に、違和感を抱いていた。

(席に座ってられない子どもたちに)最初は「絶対工具とか無理」って、(周りの先生から)言われたんだけど、この人たちにそんなじっとさせておくのも無理だから、糸のこぎりやらせたらすごいそれから好かれた。図工室に忍び込んだりして来る子も出てきて襲撃されたくらい。(中略).....でもたぶん、(子どもたちは)飢えてるっていうか、能力があるのに(先生たちが)何にもさせようとしない。だから前任の先生たちもほんとに頑張ったんだと思う。

非常勤講師という外側の視点で学校組織を見つめていたからこそ、違和感を抱いたり、教科書通りではない指導への挑戦が可能になったと考えられる。

N 講師

定期的に個展を開催している N 講師は、油絵の制作をしながら長らく学校や絵画教室で教える仕事を経験してきた。高校時代の授業と美大での授業を比較しながら、自身の教師としてのスタンスを確立してきた。

日本の美術教育ってみんなで一緒にこれしましょうとかやるけど、これが何なのかがわからんまま卒業するので、結局美術ってわけわからん、何なんあの趣味みたいなんで終わるので、ちゃんと美術史とか使いながら(教えている)。野球のルールを教えないで球の投げ方、球の打ち方だけ教えて終わりのものが多いと思うんですよ、美術の授業って。これ何だったんっていうような。

美術こそ、すごい世に出た時に役に立つもの、文化を形成してきたものたちには、全部美術が(関係)あって、建築とかもみんなあるんやでって。(自分は美大でそうやって教わって理解ができたので)ちゃんとそこらへんを教えるようにしている。(美術の授業は)学校では一番役に立たないものと思われてるので。

N 講師自身の経験から、高校教育では教えてもらえなかった美術史を積極的に授業に取り入れている。また、立体物の制作では、全生徒の作品を動画にして展示するなど、全生徒が参加できる授業作りに取り組んでいる。

I 講師

漆芸作家の I 講師は、美大生時代から助手や美術予備校の指導で教えることに携わってきた。とある地域で小学校が新設されるとき、美術教師の求人がなかったのにも関わらず応募をし「小学生にとって美術はどれだけ大切か」を、管理職に力説してきたという経験を持つ。この時の応募がきっかけで、都内の中学校にチーム・ティーチング(以下 TT と略す)の教員として採用されたのが教職入職のきっかけである。

(プリントに毎日振り返りコメントを書いてもらう方法を教えてくれたのは)私が TT やってた時の先生なんですよ。S 大学の教育学部の美術科出身の先生で。S 大で美大ではないので「技術ができない」って言ってた、自分で。

「技術がない」って。その(専任の)先生はそういうふうに私に正直に言ってくださって、私はそこを(TT で)フォローする。(中略).....多分すごい、いい授業だった。なんか2人コンビみたいな感じで、教育委員会の人

たちが見にきたりもするんですけど、その時にも褒められて。(中略).....

(教育実習生だけではなくて授業を見せ合う機会が)もっとあったらいいのになって思います。(生徒に文句言っている)他の先生たちにも、もっと見てもらって。

正規教員と一緒に授業を作り上げた経験は、I 講師のその後の授業作りの基盤となっていた。作品を作る美術科は特に、生徒とのやりとりが重要だと語る。コメントペーパーを通じて、毎時間生徒とコミュニケーションを取る実践方法は、この TT の時に得られた経験であった。

本調査から、対象者は柔軟なネットワークの中から職を得て、教職はそれら複数の職の中の 1 つとして捉えられていることが明らかとなった。今回は対象としなかった美術の専任教員の中には、「アーティストとして活躍する非常勤の先生と一緒に仕事ができるから、勉強させてもらっている」と語る者もいる。教職以外のキャリアを持つ教師と共に働くことで、子どもたちだけではなく、美術教員同士の学びの場も活性化されていると考えられる。

さらに、教職者としての彼・彼女らは正規教員・非正規教員という立場の垣根を越えて、授業実践をより良いものになろうと努めている。これは、複数の非常勤講師と共に授業を担当する美術科という教科の特性も含んでいると考えられる。この姿勢は、教科や立場を超えて学校全体で子どもたちを理解する上で、重要な協働のあり方となるであろう。着任前の情報を十分に知らされない状況の下であっても、客観的に現場や美術教育の課題を検討する眼差しを持ち、子どもたちとの関わりを通じて教師としての専門性を磨こうとしていた。

今後は、対象者の授業実践や作家同士のコミュニティに着目し、今回の語りが実際にどのように現われているのか明らかにしていきたい。

参考文献

- ・今井崇恵・田尻敦子(2020)「若手の非正規教員の働き方と初任者研修 初任の非正規教員の求めるサポートをインタビュー調査から探る」『関係性の教育学 Journal of Engaged Pedagogy』19(1),pp.151-170
- ・小杉進二(2018)「臨時的任用教員の教職観の形成プロセスに関する考察 複線径路等至性 アプローチ (TEA)による分析から—」九州教育学会研究紀要,46,p46-47
- ・高井良健一(2015)『教師のライフストーリー：高校教師の中年期の危機と再生』勁草書房
- ・永守基樹(2018)「美術教育学の現在を共有するために」,『美術教育学叢書 1 美術教育学の現在から』美術科教育学会,pp.6-20
- ・原北祥悟(2020)「公立小・中学校における非正規教員の任用傾向とその特質 助教諭の運用と教職の専門職性をめぐって」本教育経営学会紀要,62,pp.62-76
- ・藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治(2006)『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ』溪水社
- ・山崎準二(2012)『教師の発達と力量形成 - 続・教師のライフコース研究 - 』創風社

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

- ・（ポスター発表）「作家兼美術教師のライフコース研究」, 日本大学研究員ポスター展, 日本大学芸術学部, 2023
- ・（ポスター発表）「非正規雇用を選択した作家 兼 美術教師の研究 教師としての専門性に着目して」, 日本大学研究員ポスター展, 日本大学芸術学部, 2024

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------